

## 病虫害発生予察特殊報 第5号

害虫名：リンゴツボミタマバエ  
学名：*Contarinia mali* Barnes  
作物名：りんご

### 1 発生確認経過

南信地域山間部の一部りんごほ場で、花弁が肥厚し濃紅色の斑点を生じ開花しない蕾が多発した。その蕾中にはハエ目と推測される幼虫が確認された。この成虫の同定を九州大学名誉教授の湯川淳一博士に依頼したところ、平成30年10月にリンゴツボミタマバエ (*Contarinia mali* Barnes) と判定された。

本種は、大正末期～昭和初期(1920年代後半)に県北部で局地的に発生したが、耕種的防除により昭和10年(1935年)頃に終息したとの記録がある。国内における発生は長野県のみであり、海外でも発見されていない。

### 2 形態および分類

成虫の体長は雄が約2mm、雌が2.5～3mmで全体が非常に細い(図1)。体色は褐色で、胸部はやや暗色、触角は数珠状で雄では体よりやや長く、雌では体より短い。脚は雌雄とも体より長い。前翅の翅脈は2～3本である。幼虫は体長が最大2.4mm程度、白色～クリーム色で扁平なうじ状(図2)である。ハエ目タマバエ科。

### 3 被害及び生態

(1) 幼虫がりんごの蕾内部を食害し、虫えいを形成するため開花せず、結実しない。寄生を受けた蕾(虫えい)は花弁が肥厚し濃紅色の斑点を生じる(図3)。開花直前になると、正常な蕾と比較して花弁の赤みが強く指で軽くつまむと固く感じるため判別できる。また、被害花は落花期になっても落花せずに褐変したまま残っている場合が多い(図4)。

中心花が被害を受けることが多いため、発生密度が高いほ場では、品質や収量に影響がある。

なお、成虫の飛翔力が弱いため、被害が急激に拡大する恐れは小さいと考えられる。

(2) 蛹越冬し、3月末～4月上中旬(発芽初期：年により前後)に羽化、雄は3～10日、雌は4～27日間程度生存する。雌は羽化3～10日後(展葉期前後)から花芽の中に産卵し(図1)、12～15日後に孵化した幼虫は約15日で老熟する。老熟した幼虫は開花期頃に樹上の蕾(虫えい)から脱出して地面に落ち、浅い土中で繭を作り幼虫のまま経過して9月下旬に蛹化する。1年の大半を土中で潜伏し、りんごの発芽直後から満開期のわずかな期間のみ地上で活動する。年1回の発生である。

(3) りんご以外の寄主植物は不明である。

#### 4 防除対策

- (1) 本種に対する登録農薬はない(平成 30 年 11 月 30 日現在)。
- (2) 幼虫が蕾から脱出する前に被害花蕾を摘み取り、焼却又は埋却により適正に処分し、次年の発生量を軽減させる。



図 1 産卵中の雌成虫



図 2 蕾内の幼虫



図 3 寄生を受け開花しない蕾(中心花)



図 4 寄生を受け枯れた蕾

長野県病虫害防除所 (中南信担当)  
TEL : 0263-53-5642 (直通) FAX : 0263-54-4508  
E-mail : bojo-y@pref.nagano.lg.jp